急変貌する中国をかいま見て

随　筆

松　田　治　和*

北京にある中国科学院化学研究所に江英彦教授という人物がいる．大阪大学工学部の応用化学科で筆者と同級生だった関係で，いつも中国での窓口に心易くなって貰い，随分助けて貰っている．同氏はかつて中国でシリコン樹脂を初めて工業化した功績で化学工業分野でかなり名を知られており，全国人民政治協商会議委員と称する日本では参議院議員格に当たる立場にもある．ちょうど10年前，中国の豊富な石炭資源の利用研究を推進したいという情熱と，日本でのC－1化学における高いポテンシャルとの相互交流ができないかという相談があった．1984年の夏，この趣旨で各方面のご協力を戴き，まず江教授夫妻を日本に招いて各所で講演をお願いし，次いで秋に京都大学工学部の渡部良久教授とともに訪中して，主要な大学で講演をしながら共同シンポジウム開催の話をつめておいた．

翌々86年にまず蘭州で第1回中日シンポジウムを開催し，以後大阪工業大学で第2回，広州で第3回と続け，昨年秋に大連で第4回を開催し，日本側の主催学会となっている日本エネルギー学会関西支部支部長として参加する機会を得た．筆者にとって3回目，7年ぶりの訪中であった．

大連市は日本にとっても由緒深い思い出の町である．空港はペンキの匂いがまだしている改装オープン間もない様子であったが，街に入ると元満鉄の本社，警察署，大和ホテルなど，それぞれが古い姿のまま活用され，新しい目的に使用されている．一方，古い市電の走る町並みは，あちこちで道路工事が行われ，都心にある中山広場に面した中国銀行（もとの横浜正金銀行）も改装中で，通貨の交換に行った仲間がなかでウロウロしたと嘆いていた．ビルの改装だけではなく，高層ビルの建設ラッシュが新しい息吹を感じさせている．

シンポジウムの開かれた大連理工大学は二つのキャンパスに分かれていて，都心にある化工系の建物は元の大連第一中学であったそうだ．筆者らが滞在したのは都心から少し離れた電気系の学舎で，そこに大学本部や近くに宿泊施設をもつキャンパスであった．中国ではもう珍しくなったという毛沢東の巨大な石像が正面広場に立ったままで，文化革命時代の面影を残している．現地の人の話では，このような像は中国ではもう「国宝級」だと笑っていた．それは文革から一挙に近代化へ急速に路線変更した姿勢を意味している．

大連理工大学での三日間のシンポジウムを聞いて，研究に使用されている分析機器は見事に高度化されており，日本とまったく変わりはない様子を見ると，かつてアメリカと大きい差があった我が国の研究設備が，たちまち追いついたことを今中国にその同じ例を見た思いがした．特に若い研究者の英語が誠に達者で，聞けば博士課程の1年生で3ケ月間，外人教師による英会話の特訓を受けているとのことであった．大学の掲示板にTOEFLの検定講習会のアナウンスがあり，その料金が160元で現地の物価から見れば随分高価に感じたが，それだけニーズがあるのであろう．若い女性は美しく化粧をこらし，あか抜けした服装でシンポジウムに出席し，

*Haruo MATSUDA
1929年11月30日生
昭和28年大阪大学工学部応用化学科卒業　大阪大学名誉教授
現在，大阪工業大学工学部応用化学科教授，工博，応用有機金属化学専攻
TEL 06－952－3131（内線3504）

毎日服を変えて来る女性もいた．10年前，上海で化粧品をもつ女性を珍しそうに友達が取り巻いて騒いでいた写真をとったことがあったが，まさに今昔の思いである．

近代化の路線はまず農村から始まったと聞いている．ご存じの通り，農家に土地を割り当て，ある収穫量だけ国に納めればそれ以上の収穫は個人の所得になる制度に改められ，それ以後農家の生産性は飛躍的に向上した．筆者が初めて訪中したとき，古い農家の家並みの中に，「万元戸」と呼ばれるかなり目立った立派な家をいくつか見た．しかしもう万元戸の単位は100万元のオーダーになり，なかには1000万元に達する家があるという．話だけで実際に確認する機会はなかったが，日本円にして2億円だからかなりの豪邸に違いない．自家用車にベンツを備え，まさに農民貴族である．

今回同行した仲間で万里の長城を見に行った人の話では，10年前と大きく変った人波の凄さに驚いていた．たまたま日曜日であったせいもあろうが，観光に訪れる長城付近の車の渋滞と，入り口に並ぶ延々とした順番待ちの行列である．それが外国からの観光客というよりも，中国内の人達が多く，広大な国の各所からレジャーを楽しみに集った人の波なのである．裕福になったのは農民だけでなく，一般勤労者の所得レベルも上がり，経済的に余裕ができた証拠を見ることができる．

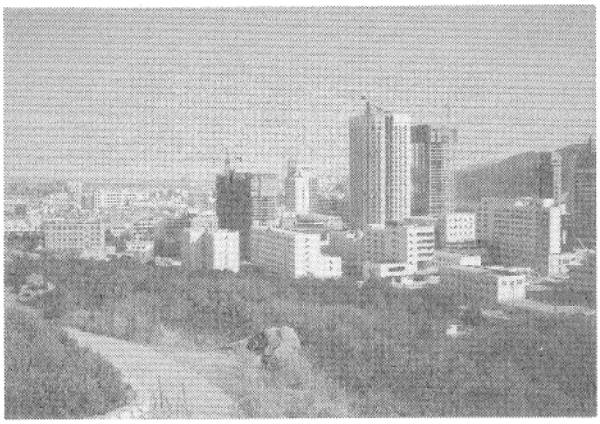
中国経済の発展状況（総人口11億7千万人）

	1980年	1985年	1990年	1992年
GNP（億元）	4,470	8,558	17,695	23,938
成長率（%）	7.9	12.8	4.1	12.8
農業総生産（億元）	1,923	3,619	7,662	9,085
工業総生産（億元）	5,154	9,716	23,924	36,802
物価上昇率（%）	6.0	8.8	2.1	5.4
勤労者平均年収（元）	762	1,148	2,140	2,711
農家平均年収（元）	1,198	2,802	3,294	3,661

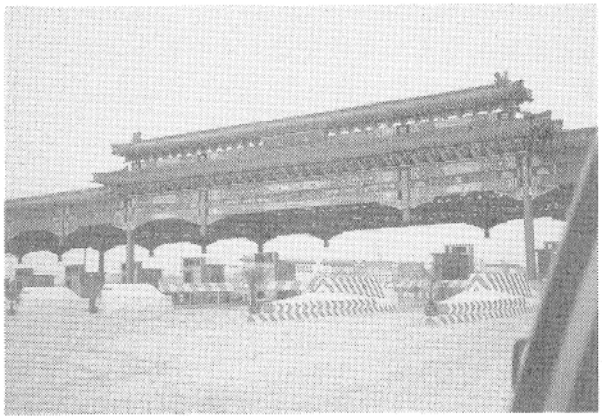
表は近刊の池上隆介氏著海外ビジネス事情「中国」から抜粋させて戴いたデータである．1980年から5年毎にGNPはまさに倍々ゲームの勢いで伸び，90年から2年間でも35%の伸びで止るところがない勢いである．かつて農民の所得が飛躍的に伸びたように，それを追うように近年は一般勤労者の伸びも著しいことが分かる．

大連から北へ車で小1時間ほど走った所に大規模な経済技術開発区がある．昔はひとつの県であったらしいが，いま大連市が新しい商工業中心地として極めて計画的かつ組織的に整備建設を進めている所である．すでに広東省が経済特区として先行し，中国内に大きなインパクトを与えた．いま上海，天津，大連がそれを急追する状況となり，政府の外資優遇措置のもと，日本を始めとする外国資本の参加が積極的である．恐らく業界に所属される本誌の読者方はすでにこのあたりの事情についてお詳しいであろうし，昨秋頃から新刊の紹介書も多く，テレビでもしばしば取り上げられている．恐縮ながら重複をお許し願うこととして，筆者が見たままを書かせて戴きたい．

開発の主体は工業開発管理有限公司となっており，これは大連市の出資のほか，日本の海外経済協力基金を中心に，日本商社や銀行などの出資によって運営される開発会社である．総面積予定約20平方kmのうち，既に第1期の開発はほぼ終り，第2期の日本向け工業用団地として約2平方kmにわたる整地が完了し，分譲中である．分譲といっても50年間の土地使用権を受けるもので，1平方mあたり8500円程度で，別途に年間の管理料が若干必要なものの驚くほど安いと言えよう．アクセス道路が整備され，近くに大埠頭も建設されている．また1階にショッピングストアーのある住宅団地が用意され，別に買い物街，カラオケのある飲食街も賑やかであった．開発区全体がぐるりと見渡せるようになった小高い丘の上から眺めると，商業ゾーンの町並みにはしゃれた新しいビルが立ち並び，馴染み深い日本のメーカーの看板が目立っている．反対側の工業ゾーンを車で走ると，ここにも日本の社名が多く，昨年中に合計200社を越えるという日本企業の進出振りが目立っている．ある有名メーカーの前を通過したとき，中国のメーカーの技師長がここに引っこ抜かれたと大連の某教授が苦笑していた．この



高台から見る大連経済技術開発区



北京空港－市内間の高速道路ゲート

地の例に見るように，中央からの号令と言うよりも地方主導で経済革命を進め，成功を収めていることについて国際通貨基金IMFも評価しているよしである．

今回のシンポジウム開催地に大連を選んだ中国側の実行委員も恐らく日本側参加者にこの開発振りを見せたかったこともあったと思われる．筆者らの帰国のすぐあと，日経新聞社と人民日報社の共催による日中経済シンポジウムがこの地で開催されたと報じられていた．日本から2時間半と近く，温和な海洋性気候と，あわびの養殖で知られるほど新鮮な魚が多く，筆者も中国では初めて刺し身を食べる気になった．いまこの地が，広東省，上海市に次ぐ中国の三大経済拠点に変貌しつつあり，先行する天津がアメリカ資本が中心になっているのに対し，日本企業の積極的進出によって，ますます日本と近くなっているような気がする．2010年には行政関係のお役所もここに移転し，まさに新都心となる予定という．

ポストシンポジウムで，大連から高速道路で北へ4時間近く走って鉄鋼業都市遼陽へでて，さらにもと奉天の瀋陽まで走った．中国初の本格的道路と言うことで，ごく最近ハルピンまで1000kmにわたって開通したばかりという．そのあと北京へでたが，空港から都心まで見事な高速道路が昨秋開通し，20分で市内に入れるようになった．2000年のオリンピック誘致を目指し準備したものであろう．シドニーに惜敗したのは誠に気の毒であった．ただこのような近代設備が整備される一方，古い建物がその間にいりまじり，シンポジウムの間，泊った宿舎ではバスの給湯が不完全で難儀した人もいた．筆者も昔懐かしい蚊帳をベットに吊って寝るなど，まだまだタイムスリップを感じるところも数多くあった．北京へ着いて，それまで1時間位ダイヤルを回し続けてもつながらなかった日本への電話が，IDDの回線ですぐつながるなど，地域による差もかなり大きいものがある．ちなみに北京でのホテルは中国国際旅行社と香港資本の合弁による中国最初のホテルらしい．82年に開業し，10年少し経たところであったが，客室にあった10周年記念誌に「解放政策によって初めて中国で合弁のこのホテルができたが，それまで中国には外資に対する法規もなく，投資にも大きな未知要素を含む知られざる巨人であつた．」と回顧されている．確かに当時はかなりのリスクを覚悟したと推察されるが，今は見事に成功し，ヨーロッパ風雰囲気で特に欧州人に評判が良いという．蛇足ながら，洗面所の水道水も「飲用可」と表示されていた．

7年ぶり3回目の中国訪問で，そのあまりの豹変ぶりに驚異の目を見張ったが，特に若者の勤勉さとエネルギー，それに海外に視野を広げる積極性を思うとき，日本の10倍近い人口を擁するこの隣国の将来が，次世代の日本にとってどんな位置付けになるのだろうかという思いもしたのである．